

近代文学への要請

中村真一郎

東京大学出版会

近代文学への疑問

一九七〇年七月一〇日 第一刷発行

著者 中村真一郎

発行者 井村寿二

発行所 勁草書房

東京都千代田区神田駿河台二一三
電話東京(二九四)六一二二(代表)

印刷所 図書印刷

製本所 和田製本

定価 二二〇〇円

© 1970, S. Nakamura

落丁・乱丁本はおとりかえ
いたします。

0095-8584-1836

装幀 富山妙子

はしがき

本書は私がこの十年ほどに亘って、その時々、各種の要請に従って書いた、日本近代文学の作家論、作品論の、殆んど全てを収めたものである。

収録の順は、扱われている作家の、文学史的な順序に従ったものであって、執筆順によったものではない。

私はこの十年、日本の近代文学についての、私自身をも含めて現代の文学者たちの見解に、次第に疑いを深めて来た。その疑いの内容を最も簡略に述べたものが、巻頭の小論である。

そして、本書に集められた文章は、この疑問について、私流に様々の角度から測深器を垂下させたものだと云うことができる。従って、本書のなかでの私の見解は、しばしば旧来の文学史の常識とは異なっているということを、特に若い読者に注意してほしいと思う。

そしてまた、これらの私の見解が、かなり直接に私自身の創作活動とも呼応したものである、と云うことも告白しておきたい。

なお、本書に収めた文章は、私の既出の評論集に収めたものとは重複を避けた。それ故、本書以外の私の同種の文章に接しようと思う読者のために、巻末にそれらの文章の表題と、それを収録した評論集の名とを、表にして附載しておいた。

本書が、日本の近代文学について、読者により柔軟な思考のための一助となれば、私は満足である。私は本来、自分の文章が読者の中に、自由な精神の運動のための発条となることを希んでいるものであり、必ずしも私と同じ意見を読者に持つてほしいと強制することは好まない。そして文芸批評とはそういうものであるという信念の保持者なのである。

一九七〇年初夏

中村真一郎

はしがき

I

近代文学への疑問

昭和十年代作家の試み I

昭和十年代作家の試み II

女が描けるかどうか、また、どのように描けるかということなど……

II

夏目漱石の作品（小さなスケッチ）

正宗白鳥と自然主義

永井荷風

谷崎潤一郎

佐藤春夫

萩原朔太郎

室生犀星

207 167 117 105 97 91 53 35 31 16 3

豊島与志雄

折口信夫

横光利一

川端康成

堀 辰雄

三人の特異な作家

神西 清・丸岡 明・由起しげ子

佐多稲子の抒情

——『灰色の午後』を読んで——

高見 順

梅崎春生『砂時計』

立原道造——人と作品

III

短篇小説の読み方

付 記

467

459

449

437

391

375

357

312

289

248

243

227

I

近代文学への疑問

昨年の末の慌だしい数日を、私は事情があつて、思いがけなくも、川端康成氏の短篇小説を百数十篇も、一時に読むことになり、ホテルに籠つて、連日連夜、赤鉛筆片手に、頁を繰つて行つた。——その仕事は、はからずも昭和のひとりの作家の長い文学的生涯を、いわば飛石づたいに、年代を追つて辿るという結果になつた。そして、私の想いは、作者の川端康成という一人格から、さらに広い一般的な場へ拡つて行つた。

私はそこに、今世紀の二十年代から六十年代に至る、わが国の小説の変遷の跡を読むことになつたのである。私は一篇また一篇と、抒情的な雰囲気の微妙に彩りを変えて行く、川端氏の作品に眼を通して行きながら、何度も、日本の近代文学とは、一体、何なのだろう、という疑問が、頭の隅を通過して行くのを感じた。

そうして、年が変り、私は年末の仕事の余波のようにして、新たに完結したという、同じ作者の『あ
る人の生のなかに』という長篇小説を読んだ。が、私はやはり長い時間をかけて、この淡々たる長篇を

読みおえた後で、奇妙な事実気がついた。

実はこの作品は、それが川端氏のいつものことだが、もう数年前に、書き出したもので、私はだから、この作品については、既にひとつのイメージが出来上っていた。

それは主人公の文学者の内面を描いた作品で、しかも、その内面というのは、他の川端氏の作品とは異つて、その文学者の職業の内容に対する反省をも述べてあった。私の読んだプレ・オリジナルの方では、主人公の作家が、茶の間で新聞紙を拵げながら、わが国の近代文学とは一体、何なのか、という主人公自身もそれに参加しているものの本体についての疑問に、ぼんやりと思いを俾まよわせる、という場面があった。そして、その主人公の疑問は、自ら西欧文明と近代日本との関係という、根本問題へまで深化して行く気配を見せていた。

川端氏の作品には、時々、氏の文学者としての文明批評が、さりげなく書き込まれていることがある。しかし、いわばそれを主題として提出しているように見えた、この作品について、私は長い間、心のどこかでその先を読みたいという気持を持ちつづけていたらしい。

それが完結したということ、それから直前に、川端氏自身の各時期に互る仕事を一望しながら、近代文学の歴史についていろいろ、夢想したということが、改めて私にこの作品を、通して読み直す気にならせた半ば無意識の衝動だったのだろう。

ところが、今、言った「奇妙な事実」というのは、今度、纏めて発表になった『ある人の生のなか』からは、そうした主人公の文学史的考察というか、わが近代文学についての夢想というか、そうし

た要素は全然、消えうせてしまっている。

作者は改作するに際して、小説の進展からははみ出てきたらしい、その主題を抹殺してしまったのだろう。私はいささか、残念な気がした。

だから、今回、改めて雑誌に出た物語の主人公の小説家は、もうそうした、普通の小説には滅多に出ないような感想を考へることは、やめてしまっている。私は、いささか肩すかしをくったような気がして、物足らなくなった。

物足らなくなった私は、昨年末以来、何度も頭の片隅に去来していた疑問、そして、それはかつてのブレ・オリジナルのなかで、川端氏の主人公も感じていた疑問について、さらにいろいろと思いを巡らして見ることになった。——その結果が、この小文となることになったわけである。

わが国の近代文学とは、一体、いかなるものか。第一にそれはわが国の文学史のなかで、王朝や中世や江戸期に対して、もうひとつの別の時代を劃すだけの、独立した完結性と独自性を持っているか。第二にそれは、西欧諸国の近代文学とどのような共通性と異質性を持っているか。つまり、どれだけ「日本文学」であり、同時に、「近代文学」であるのか。——

こうした疑問は、本来、文学史家の考へるべき性質のものであって、作家にとってはどうでもいい、あるいは考へても仕方のない、迂遠な問題なのだろうか。

私は必ずしも、そうだとは思わない。現に、川端氏の主人公の小説家も、自分のやっている仕事につ

いて、四十八歳になって、改めて自然とそうした疑問の、胸中に胚胎して来ているのを、ふとしたきっかけで、意識に上せていた。

川端氏の主人公は、こう考える。——自分たち、近代の日本の小説家たちは、明治以来、西洋の方を向いていて、日本の伝統には反逆してやって来た。今もって、そうである。そうして、その成果は、どうかというと、甚だ疑問である。(ということとは、日本の文学の歴史のなかでの過去の幾つかの時期に、匹敵するだけの仕事で、近代には生れていない、という意味だろう。)

なるほど、数人の偉れた文学者はいた。しかし、彼等の創り出したものは、疑問なきを得ない。その理由は結局、西欧文学が日本の伝統のなかに、根を下さなかつたからである。しかし、それは、いずれは根を下し、見事な開花を見せる時期が来るのだろうか。(川端氏の主人公は、そのように、想いを発展させて行っていた。)それも甚だ、疑問である。何故なら、西欧の小説自体が、十九世紀において頂点に達してからは下降線を辿りつつあり、そのデカダンス期において接触したわれわれの方が、そこから強い生命力を掬むことは、甚だ困難だからである。……

四十八歳の川端氏の主人公は、このような悲観的な見解に到達していた。(それを今日、川端氏が消してしまったのは、純粹にあの小説の完成のための、技巧的配慮に過ぎないのか、それとも、そうした考察に対して、そのようなことは、どちらでもよろしいと考えるに至ったためなのか。私はもし知ることができれば、それも知りたいような気がする。)

こう書いて来て、私は必ずしも、川端氏の小説の主人公の小説家とは、同じ解答には到達してはいないことに気が付いた。しかし、疑問の発想の出方は、似たものである。

私は、一体、日本の近代文学が不毛だとは思わない。文学史の各時期に対して、ひとつの独自性を主張し得ることは確かである。漱石や鷗外が、紫式部や西鶴とは異った仕事をしたことは事実だし、これらの近代の小説家が日本の近代社会の独自性に、独特の表現を与えることに成功したのも、確実だろう。特に「小説」というジャンルを支配的なものにした、という点は、近代文学史上の第一頁に、特筆されるべき事柄である。

そして、この「小説」というジャンルが、わが国の前代の文学のなから生れて来たものではなく、西洋の近代小説の直接の導入によって生れた、ということも、否定できない。

それでは、その導入がどの程度に成功したか。——そこが各人の意見の分れるところかも知れない。たとえば、永井荷風は近代諸国の文学で、外国の影響を受けていない唯一のものは、日本のそれであるといった。これは荷風らしい、皮肉であり逆説である。

西洋文学の翻訳は氾濫しているが、その真の摂取はまるで行われておらず、幼稚な猿真似ばかりが行っている、と荷風は言いたかったのだらう。それはそうかも知れない。

しかし、西欧諸国における相互影響と、西欧文化圏の外に、十九世紀の半ばまでいたわが国とを、同じ水準で比較しようというのは、洒落としてはとにかく、文化史的には乱暴極まる話である。

こうした全否定の意見でなく、どういふ程度に、どのような具合に、摂取されたのか、という点につ

いては、従来も、さまざまな見解が発表されているし、私自身も、何度かそれを、たとえば創作心理の側から、問題にして自分を納得させて来た。

私が以前から気になっていたことは、日本の小説と、西欧諸国の小説とには、同じ小説といつてもかなり肌合の違ひがあり（これは何びとも承認するだろう）、そして、その異りは、国民性の相違に帰せられるものであるか、どうか、という疑問である。

が、もし国民性の相違ということになれば、それは一種の決定論になる。日本人は小説を書くには不適當な国民ではないか、という議論を読んだことさえある。

が、私はどうもそうではないような気がする。肌合の相違の、最もはっきりしているのは、日本の多くの作家が「私小説的発想」をするという点である。また多くの批評家が小説を作者の個人生活を索引として利用しながら、論じることである。少くとも批評家側において、作品に作者の個人的な息付きの強くでているものに好意的になり、架空の物語に対しては、感動することが少い、という傾向は顯著である。フィクションはしばしば通俗性への危険を指摘されるが、私小説的作品はそうした懼れを抱かれることはない。

そして、もう一度、繰り返しになるが、日本人は本来、私小説的発想を得意とするのか、フィクションを嫌う性質があるのか。

——ここにたとえば、伊藤整氏の「求道者」と「認識者」という、作家の二つの型の分類が登場する。私は、この伊藤氏の分類の根底にあるのは、近代の日本の文学者が、「求道的」な方に偏しているとい

う認識であつて、それに対して「認識者」という型を提示することで、小説ジャンルにおけるフィクションというものの重要性を、改めて強調しようというのが、伊藤氏の隠れた意図であるように感じた。私自身も、かつて、幾分か伊藤氏と似た発想から、しかし、伊藤氏とは異なる方向から、文学そのものに対する文学者の態度には二種あり、一方を「自己中心的」、他方を「文学中心的」と名付けて説明してみた。

「自己中心的」とは、文学は要するに、自我の表現の道具である、という考え方であり、「文学中心的」とは自分は「文学」というものを作っていると信じる型である。

前者にとっては、文学は彼自身だけのものであり、彼にとっては自分の人生が先ず第一であり、文学のジャンルや形式の問題は二の次である。何故なら、彼にとっては、「文学」も、彼だけのものであり、文学一般、——彼の外部に存在する文学というものは見えていないからである。

それに対して、後者の人間にとっては、先ず、彼自身の好みとは独立して、「文学」というものが存在し、その文学に自分も参加しているという考え方である。こちらの型の作家にとっては、だから、形式とかジャンルとかいうものは、彼自身の創作以前に既に存在していて、彼が仕事をしようという場合、それが規範として働く。

前者は「私小説」な発想をするし、後者は「フィクション」によつて考える。

そうして、日本の近代作家とは「自己中心的」な思考をする人が多かった。それが日本の近代文学の特殊性を形成することになった。

多くの作家が、そのような思考の型を示すようになったのは、近代の日本の作家と社会との関係が悲劇的な背反という形をとっていたからである。——だから、多くの作家にとっては、「彼自身の文学」しか存在しなかった。文学が文明の一所産である、という風に考えるためには社会が存在しなければならぬ。社会から自らを引き離して生きる人間にとっては、彼自身から独立した「文学」というようなものは考えようがない。

そうして、もし、日本の小説がより豊かになるためには、将来の文学者はそうした隠者的な態度から自由になって、「文学中心的」な考え方を身につける方がいいのではないか。そのためには、当然、社会と彼自身との関係の仕方は変わってくるし、また、そうなってくれば、必然的に、「フィクション」という発想法にも慣れてくるのではないか。……

以上が、ある時期の私の考え方であった。そして、この考え方と、川端氏の小説の主人公の、日本近代小説の未成熟は西欧文学の導入が日本の伝統のなかに根差さなかつたのではないか、という感想とを、交叉させて見ると、それは日本近代の文学者が、西欧文学を学ぶのに、専ら「自己中心的」に読んだからではないか、という結論が出てくる。

明治の作家はしばしば西欧やロシアの小説を読む場合、小説を読むというより、その小説の主人公に自分をなぞらえて読んだ、ということ、確か中村光夫氏も指摘していた。それが小説というものを、私小説的に考える習慣を生んで行った、あるいは私小説が純粹な小説だという考え方を育てた、という